

特集

よい質的研究論文を
発表するために

セミナー「How to Peer Review and Publish Qualitative Papers」より

研究論文は、査読を経てWebや紙媒体のジャーナルに掲載され、読む人に新しい知識や視点を提供する。著者をはじめ査読者、編集委員、編集者、編集委員長などが研究論文の採択プロセスに関与する。研究成果が発表される意義と、ジャーナルの編集方針が一致している場合、論文をより理解されやすく洗練していくプロセスを皆で歩む、協働作業である。

自分の論文が査読を経て、査読に応じて修正する間に、本当によくなって掲載されたと感謝するのは、幸福な瞬間である。しかし、その幸福を味わえている人は多くはないのではないか。傷つけられたと感じたり、業績をあげるために不本意な雑誌への投稿に甘んじ、雑誌の編集方針など関心がないという場合も多いのではないかと、という問題意識をもったことが、筆者が研究に取り組んだきっかけである。

今回のセミナーでは、編集委員の役割に焦点を当てた。査読コメントを書くのは難しい。複数の査読者間で意見が分かれることもよくある。編集委員は、査読者の指摘しているポイントを見極め、修正可能性、作業のタイムリミットとのバランスから、著者にどのような形でフィードバックするかを考える役割がある。さらに編集委員長は、査読者の属性、編集委員の経験、ジャーナル全体の採択状況、発行の状況、IF（インパクトファクター）や著者の満足度などを総合的にみた上で、困難ケースの調整にあたる。ある時は自分自身が第3の査読者となり、ある時は調整役に徹する。査読者や編集委員の選定にも関わる。著者と査読者の立場や主張を理解できる、また、しなくてはならない立場でもある。

Dr. TannerとDr. Shawは、著名なジャーナルの編集委員長として、雑誌のポリシーを実現するためのシステムづくりを積み重ねてこられた。今回、セミナーのためにお招きできたことはとても光栄であった。

論文発表の過程に関わることは、自らの看護に対する考え方を具現化することだ。その考えを共有できる学会を選んで入会し、学会活動の一環として査読委員や編集委員として活動する。もちろん、活動しながら変えていく部分もあるだろう。しかし、学会の理念と編集方針は連動している必要がある。学会活動、編集活動の究極のゴールは、その学問にどのような知識を提供しようかということである。その具体的な形が研究論文であり、研究方法論は知識の提供方法に関わる部分である。

私たちの査読が、チェックに終わっていないか、論文発表の先にある、看護学の発展に視線を向けることができているかどうか。私たちは常に自問し、日々学ぶ必要がある。

企画：萱間真美（聖路加国際大学大学院看護学研究科教授）

*平成27～30年度文部科学研究費補助金基盤研究（B）「看護学の質的研究論文査読ガイドラインと査読者教育プログラムの開発」（研究代表者：萱間真美（聖路加国際大）、分担研究者：木下康仁（聖路加国際大）、小松浩子（慶應義塾大）、グレッグ美鈴（神戸市看護大）、麻原きよみ（聖路加国際大））